高山さんの死を——無駄にするな！

三川仕繰　芳川　勝

仲間が殺された

仲間が殺された。いつも同じように家を出て、いつも同じように家に帰っていた仲間が、今日からはもう帰らなかった。

冷い屍となって家に帰った高山さんは下請の係員で、その日組夫の仲間といっしょに三池島への連絡坑道で掘削作業中、天盤崩落で殺された。七日のことだった。

ほかにもう一人、その前の日足首から切断した和田文雄さんがいる。劣悪な労働条件下で働かされてきた組夫の和田さんは三十二度という高温の中で、スクレパーコンベヤーに足を突っこんで切断したのである。

三池では、昭和四十六年になってから、早くも五名もの仲間が合理化のいけにえにされた。そのうちの四名が三川鉱でありどの場合も保安無視の作業をさせられていたことが原因となって、ひき起した災害である。

危い作業だとは知りつつも、あえてそれをしなければ、食ってゆけるだけの賃金にならぬのが、炭鉱に働いている組合員や直轄工の実態である。

日本刀でおどされ

組夫の場合を見てみよう。まず一番方のときには、組の責任者が組夫を起こして回り、バスに乗せて運んで、三井建設の脱衣場に繰りこんで、仕事をさせている。

現場では、直轄鉱員なみには扱われず、労働条件など無視され、三十四～五度の高温現場でこき使われ、たとえ組夫の人が倒れても、組としては何の対策もやってはくれない。

三池での生活に見切りをつけてケツ割って逃げ出せばつれもどされ、日本刀でおどされ、むりやりに働かされる。そんな苛酷な職場の実態のうえに、三井独占はあぐらをかいているのである。

熱中症続出の職場

一般の採炭工でも、いまの労働はひどい。例を三川鉱二十六卸七卸払にとると、下段払の終端で気温が三十四度。排気道になると三十五度という高温だ。そんな現場で、炭で顔を真っ黒に汚し、目玉だけギョロギョロ光らしながら作業している。

しかも、今まで四名で一班をつくって作業していたのが三名になり、「今後は二名でしてもらいたい」との提案が、新労組に出されているし、これまで二名で、炭壁にドリルで穴を掘る作業をしてきたのを、一名にしようとしているし、また、一つの作業を終ればホッとする間も与えず次の作業をいいつける。

三交替の機械工などは、ベルトを監視するばかりか、ベルトで流れてくるボタをおろす作業をすら押しつけられながら、正味一時間の休憩も与えようとはしない。休みも、ベルトを監視しながら弁当を食べている実態だ。

一方交通の坑内で、石炭を運搬する大型炭函は一方的に無線でその行く先を指示され、切羽の電気工や機械工は誘導無線をもたせられて、今どこで、どんな作業をしているか、一部始終監視されていて、休憩も、炭函に炭を積む間にとらせるなど、人間無視の監視労働に追いこまれている。

労働者が悪いのだ

会社幹部はそんな職場の実態など見ようともせず、実績が予算出炭を下回ったというので、各社宅を回っては、出勤督励にやっ気になっている。そして彼らは、新労組員の主婦を前にして、のうのうといっている——

「炭が出ないのは、労働者の出勤が悪いからだ。賃金が安いのは出勤をしないからだ」

鉱長・副長らは、毎日のように現場にさがっては、係員に当りちらし、昇坑した係員を鉱長室に呼びつけては、頭ごなしにどなりつける。だから係員は、現場の暑さのため労働者が熱中症で倒れると出勤を督励して、人海戦術で次々に熱い現場に労働者をぶちこむ。そんな坑内環境の中で働かされている自分たちのことを思うと、思わずゾッとする。

俺たちは強く叫ぶ——現場をずずしくせよ。俺たちに満勤をのぞむなら、満勤できる作業環境をつくれ。働く者の命を補償せよ。高山さんの犠牲を、無駄にするな、と。

おねがい

組合員の皆さん、どしどし職場の実態を本紙を通して明らかにし、聞いについて考えてゆきましょう。

その後の職場の実態は

「自走枠は導入されたが…」　手記

いま三川鉱でシールド自走枠がすでに導入され、会社は正式に稼動にはいる準備をいそいでいる。やがて三池労組員の全員と新労組員の大部分の人が、自走枠払からはね出されるのは目に見えている。

いったい自走枠導入後の職場と、はね出された労働者の生活の実態はどうか。ひと足先に、にがい経験をなめさせられた宮浦の二人の仲間が、次の手記を寄せてくれた。

何はさておき自分の姿勢が大切

掘進工　朽網勝喜

朽網さん

より安い賃金でより多くの石炭を出し、もうけた金で合理化を行い、さらにもうけては合理化を行う資本のやり方は、労働者の犠牲のうえにしかなり立たない。

三井鉱山は、シールド自走枠の導入により、五千人—二万トン体制から三千人—二万トン体制への強化をめざしている。

昨年四山に自走枠が導入され、本年三月には宮浦へ。そしてこんど三川に、きたる十月よりの本格的操業を目標に、導入された。

宮浦の、払採炭の私達の職場では、シールド自走枠が導入されたことによって、約三分の二の作業人員が不要となり、会社は掘進への配転を強行した。

しかもそのうえに、三池労組員の私達は、掘進本来の仕事からさえハネ出され、雑作業を押しつけられている。ハネ出された者の中には、若干の新労組員の方もいるのであるが、このように三池労組員は、たとえどれほどまじめに働いても、またたとえどれほど出勤が良くても、ことごとに本来の仕事からハネ出され、不合理な差別を受けている。

新労組員の人々の間では、シールド自走枠導入の問題がクローズアップされてきて、いよいよ配転が間近になってきた時点から、急に出勤状態が良くなった。それでもその新労組員の中からさえ、ハネ出され組が出てきたのである。

一方、シールド自走枠の仕事に抜てきされていった新労組員の人々はどうかといえば、最初の間こそエリート意識があったかも知れないが、人間が本来使うべきその機械から追い回されている。休みたくても休まれない。トン当り賃金は引き下げられる。会社ZD政策と相まって、益々拡大されつつある矛盾にさらされている。

このように次々に襲ってくる合理化をハネ返すためには、職場の一人ひとりの目的・意識的な行動が日常的になされなければならない。

まず自分自身が、日常合理化にどう対処しているのか。新労組合員に、自分達の闘いを理解し、協力してもらうためにどう知らせようとしているのか、十分反省しなければなるまい。その上に立ってはじめて、組織的な闘いが効果を上げてくる。

新労組幹部が、会社の合理化提案をのむ。すると、三池労組がどんなに反対しても、合理化は強行される。闘ってもおんなじだ——この考え方を克服して、闘うことへの再認識が今一番大切な気がする。各現場での日常の保安闘争・生産点での対決を改めて決意しよう。

「この分なら」と生涯をかけたのに

掘進工　平田光男

平田さん

昭和四十三年の暮れ、宮浦鉱の坑口移転反対闘争も激しい頃、宮浦では各職種から払採炭工を募集した。私は、妻と話し合いをせずそれに申し込んだ。

年が明けると同時に、三川鉱坑口より、単層払工として入坑。

早速妻に、「内職は止めて家庭の仕事に専念するように」とタンカを切ったが……たしかに、保線工時代からすると収入が増えたものの、思う程のものではなく、妻はぶつぶついって新しい職を見つけて、また家を空けるようになった。

そうこうする中にも仕事になれて行き、たとえ人なみとまでは行かなくとも、重い鉄柱もカッぺもあつかえるようになった。

最低の合建ながらも収入が増え、子供等が欲しがる物は買えるようになり、一寸としたくらいでは妻とのケンカもなくなった。

「この分なら、一生涯単層払工として働けるぞ」——とそう思い自分自身楽しみにもした。

ところが、資本は労働者にあまくない。四山にシールド自走枠が導入され、続いて今年の三月からは宮浦に導入され、稼動した。もちろん三池労組員は全員、その中からハネ出されてしまった。

一方単層払の方の採炭作業は、そこに残った人員だけでは三方体制が組めず、そのため私たちの乙方をなくしてしまって、甲方と丙方の二方で作業をすすめるようになった。

ところが、それもつかの間のことだった。去る七月十九日より、こんどは会社はその単層払を、完全になくしてしまった。そのため私たちは採重工の人々と共に全員開発に統合され、八月二十日からは一方的に掘進工にされてしまったのである。

私は、鉱山学校にも行っていない。保線工の時代も、車道の仕事ばかりで、枠張り作業をしたこともない。さらに払では油さしばかりで、鉄柱を立てることもなかったから、あえて枠張を覚える必要もなかった。

だが、掘進工ともなればそうしたわけには行かぬ。坑木を運搬し金枠を運搬し、枠を張らねばならぬ。「おらア、しきらんばん」——では、同僚からさえうとんじられよう。あまえてはおれぬ。

第一、B級作業ばかりしていては、C級作業のときに比べて給料が二万円以上も下がるという。それではたまらぬから、会社は新労組員の人々を優先的にC級作業に繰り込み、三池労組員はC級作業からハネ出す。抗議すれば三池労組員を、名目だけのC級作業に繰り込む。

かといって、切羽でC級作業をしている新労組員の人々はひどい。めしを食べたかと思うと、切羽にかけ込み作業している。ともすれば、私たちも会社のひどいペースの中に巻き込まれる。

会社は私たちが要求しても、休憩所もなかなか作ってはくれない。なるべく、食事も切羽の近くでさせようとしているのだ。

とにかく、人間よりも機械を優先的に考え、労働者のことなどツメのアカほどにも思っていない会社の姿勢が、職制の態度にある。

さすがにたまりかねたある新労組員の人が、新労組幹部に不平・不満をぶちまけたところ、その幹部はいったという——「そげん会社に不満があるなら、会社をやめてもよかばい」。

日給五千五百円はいかが？

このほど読売新聞に「社員募集」のチラシが折りこまれ、各家庭に配られた。

雇主は〝昌和工業株式会社〟（市内山下町六十八番地）。何のことはない、わが三井三池炭鉱に働く組夫の募集。

——鉱員十五名。勤務場所は三井三池四山鉱、および三川鉱。日給＝二千二百円～五千五百円。社宅＝貸与。待遇＝賞与年二回、各種手当あり。保険＝労災、健保、その他保険加入、と。

職場の声は——「賃金をはたしてそれだけくれるかどうか、どんな重労働を押しつけてくるかどうか、坑内にさがって見ると、きっと目を回してたまがるだろう。

それにしても同じ三井の手が、一方の化学では千五百人もの本工の首を切り、他方では組夫の採用。あきれてものがいえん。

戦争中、軍の手がたった一坪二円四十銭で百姓から買いあげた土地を、いつの間にかわがものにしてしまってグリーンランドをつくる三井。

緑の広場につられて遊びに行けば、何から何まで金をとりたてる仕組みに、折角入ったお客も泣かされ通し。あれでは二度とくるもんか……とお客に腹かかせるために経営しよるようなもん。

よそから、公害のない企業が大牟田に進出を企てても、市の土地の三分の一がとれまた三井の占有。旗をまいて逃げ返っている。

とにかく、三井がいる限り、大牟田にはしあわせはこない。こやつを追い出すことが先決」